第二章　石造文化財解説

一　庚申塔・青面金剛

庚申の祭りは、かのえ（庚）さる（申）の日に行なわれるもので、大方は庚申講の講中の人たちが中心になっている。昭和の戦前までは、農村では広く行き渡っていて、六〇日目のこの日に祭りが催され、六〇年目の庚申の年には、所によってはその記念として庚申塔が建てられた。この信仰は、庶民の間では道祖神・地蔵の信仰などとともに最も多くの人々に支えられてきたものである。

この信仰内容の発生は、三世紀から四世紀の間に中国の道士によって成立されたものとされており、道教の三尸説から発した。その趣意は抱朴子の微旨篇によると「人間の体内には三尸がいる。三尸は形はないけれども、実は鬼神や霊魂のたぐいである。人間が死ぬと三尸は鬼となって勝手に遊び歩いたり、まつりを受けたりすることができるので、つねに人の早死を望み、庚申の日ごとに天にのぼって人間の過失を司命の神に告げる」としている。これが日本への伝来は奈良時代の初めと考えられている。平安時代には、中央では貴族の間で管弦楽の行事の間に、庚申の日に三尸の害を防ぐために「守庚申」が行なわれていた。その後、庶民の間でも庚申の日には集会をして夜を徹して祭りをした。この日に早く寝ると白髪が増えるとか、同衾すると生まれる子どもは盗っ人になるなどといわれて禁忌とされていた。

眠らないためには、世間話を面白おかしくした。「話はお庚申の晩に」などといわれるのもそこから出た。庚申の主神は、近世以降のものほとんどは、三眼六臂で邪鬼を踏まえた青面金剛であるが、北信地方には文字碑のものが多い。

青面金剛は、元来がインドの土俗神としての破壊神であり、頸に毒蛇をまとい、ドクロの頸飾りをつけ、悪鬼を足下に踏みつけた像容が一般的である。しかし、日本に入って来て種々の信仰と習合し、次のようなものが広まった。

湯田中（No.6）

佐野（No.67）

仏像系―阿弥陀・大日・薬師・釈迦・地蔵・不動明王
富士浅間系―富士教に習合
猿田彦系―猿田彦大神と習合
山ノ内の庚申塔も、馬頭観音に次いで多く、他をはるかにしのいでいる。

二　道祖神

道祖神は記録の上では、既に『記紀』にその発生について、道反大神・塞座黄泉大神・来名戸祖神などとして語られている。しかし、それ以前もこれと類似の信仰のあったことがはっきりしているほどの古いものである。

だが、その信仰内容は多様に分岐されていて、その本源が何かが不明なくらいである。これらの中で、広くいわれているものでは、塞ぎの神、縁結び、夫婦和合、子育て、作神、行路の守護などで、習合から習合へ、転化から転化をしてきた民間信仰の特性の代表的なものといってもよいくらいである。

像容でも様々の姿態をしたものがある。男女の双体握手像、祝言像、抱擁像などの相愛像があり、男根、石祠なども造られた。北信地方には文字碑が多く、塞神、道祖神、道神、道陸神などと刻まれている。

しかし、古来から道の神としての信仰が中核をなしていたと一応みてもよいと思われる。中国の古代信仰に、旅行の守護神として道祖神があり、その信仰が日本に伝わり塞神と習合したといわれている。これは、日本では古代に道祖を「ふなど」と読ませたり、道祖神を「さえの神」と読ませていることからも立証できるからである。

このような点から、道祖神は村や家に悪魔が入ってくるのを塞ぐ神であると同時に、道路を守る神であり、旅人の安全を守る神ともなったと考えられる。そして、猿田彦の信仰にも敷衍されたわけである。他方、性器崇拝の習俗とも習合して、良縁、子授け、安産などの信仰も派生した。

佐　野（No.1）

山ノ内では、道祖神の石塔は一八基を数えるくらいで、県内の中信、南信に比べるとその分布は少ない。そして、その碑は文字碑が多く、像容のものは珍しいくらいである。像容は双体道祖神であるが、中野市以北ではあまり見られなく貴重なものである。しかしこの双体道祖神は、群馬県の西部から草津峠を越えて入って来たものといわれ、いずれにしても隣県の群馬県との関係の密なるものがあるようである。

三　馬頭観音

石仏としての馬頭観音は、関東地方などでは、全国的に第一の造数

を占めている地蔵をしのいでいるほど多い。当地域でも、特殊なものの種別（供養塔など）を除いては、群を抜いて多く造られている。

馬頭観音の信仰は、日本には奈良時代に既に入って来ており、当初は六道思想の普及とともに、畜生道に落ちた衆生の救済を主としていた。これが近世になると馬が交通運輸の花形になった社会情勢に伴って、馬の無病息災を願い、また死馬の供養をする信仰となって造像されるようになった。これが昭和時代に入っても続いてきた。しかし、一方民間信仰では、馬に対する信仰の中に、水神信仰や農作信仰にもつながるものもあったことから、馬頭観音信仰の一面が大切に取り上げられたこともあった。

石仏としての馬頭観音の原初は、平安時代に大分県の五尊磨崖仏の中に見られ、室町時代には春山に六観音の一としてあるが、単独に造像されたものは、近世も中期に入ってからである。

しかし、これが急激に増加したのは全国を通じて明治期以後である。そして近世後期には、それ以前の最多数を示していた石像の地蔵・庚申・道祖神をしのぐようになった。

横　倉（No.32）

馬頭観音が供養されている場所は、大体路傍か村境か、または村はずれの寺院や堂などに多い。その理由は、馬が軍事用や駅馬、伝馬から庶民のための交通運輸に利用され、交通機関に関係した人々や、農民には欠かされないものとなったからである。

像容は、仏像の頭上に馬の顔の浮き彫りをしてあるものが多く、一見して馬頭観音ということが分かるものである。しかし、中には三面六臂か八臂のものもあり、忿怒相をしているものも見られる。

当地域の馬頭観音像の数も、ほかの種別のものに比べてかけ離れてその数が多いが、けわしい山道であるが重要な街道が、地域の中を通っていたこと、名だたる温泉地であったことなどで、交通運輸の仕事に携わっていた人が多く、馬を盛んに利用したことによるものである。

四　二十三夜塔

二十三夜塔は月待供養塔の一種で、以前はそのほとんどが女人講の人々によって建てられたものである。そしてその信仰は、中世から行なわれ現在もその大半は月を観賞するといった風流なものでなく、女性に関連した妊娠や育児にかかわる信仰や、ひいては生産の神としての信仰が中核であった。

その起源は既に平安時代までさかのぼれるが、庶民へも広まって隆盛になったのは、室町時代に入ってからである。この祭祀が月を中心としており、女性と関連の深い理由は、日本の祭りは古来から月の運行をもとにして考えられていたことからきている。

日本では満月の十五夜に祭祀が行なわれたことが一番多く、その代表的なものが、一月十五日の小正月になる。次には、月の七日前後の

渋（No.27）

上弦のころと、二十日前後の下弦のころに集中した。

この下弦のころの祭祀の一つが二十三夜講であり、また広く行なわれている十九夜講である。信仰内容の育児・産育や生産関係は、女性の生理の現象からきているもので、女人講中の色彩の強いものとなるのは自然のことである。祭神は、古くは月自体であったが、仏教に関連すると浄土教に結ばれ、安産祈願や子孫繁栄の仏陀としての勢至菩薩が大部分本尊とされた。県内も同様であり、その信仰は特に多く広まっている。

勢至菩薩は、「偉大な威力を獲得した者」の意味で、智慧を表すこの仏は、阿弥陀如来の右脇侍として、左脇侍の観世音菩薩とともに弥陀三尊を構成する尊いものである。また、十三仏の九番目に挙げられており、一周忌のときの主尊である。

像容は、宝冠上に宝瓶が載せられており、二臂合掌の姿が多い。独尊としては月待主尊像が古くからあるが、主としては江戸中期以降のものが多い。文字碑も方々にあるが、概して刻像のものより新しく造られたものである。「大勢至菩薩」「大勢至尊」「得大勢至菩薩」「勢至尊」などと刻まれている。

山ノ内にある二十三夜塔は、他地域にあるものと同様に、細長い石に刻まれたものが多く、女性的な優雅な感じを抱かせるものが大部分である。暗夜の道も、この仏陀は明るく照らして迷うことなく便宜を与えてくれると言い伝えられている。

五　観音菩薩

観世音とは、世間の衆生が救いを求めるのを聞くと、直ちに救済するという意であり、菩薩は、仏道に入って自らの菩薩と真如の理を悟り、また大乗菩薩戒を修めて他益の戒律に覚め、仏果を成就した行者をさす。しかし、この観世音菩薩は、インドから中国を渡って日本へ渡来するまでには、その間に各民族の信仰と習合して諸説が表れており、日本にも次々にそれらの教典類が伝えられている。

普通に観音の種別といえば、六観音か七観音になるが、十一面観音はその後で、六世紀後半に漢訳されたものから出ているものである。続いて漢訳で入って来たものが、不空羂索観音、千手観音、馬頭観音、准胝観音に関するものであり、八世紀初めには如意輪観音の漢訳が入って六観音になった。これに観音の本態である聖観音を含めて七観音といっている。

これらが密教の陀羅尼集経等の所産であることから、平安時代以降はそれらの造像と信仰が盛んになってきたといわれている。わが国で札所めぐりが行なわれ出したのはこのころで、平安時代後期には西国三十三か所の札所が成立し、次に坂東、秩父等の札所も誕生している。

さらに観音は三十三に姿を変えて信者の願いによって、その救済に

渋（No.56）

当たるとされており、普門品のほかに多くの教典が観世音を説いて三十三態を挙げている。これは正式にいうと、聖観音の三十三態というべきもので、中国と日本の信仰が交わった江戸時代にいわれていたのは、次のような観音が挙げられている。

楊柳観音・竜頭・持経・円光・遊戯・白衣・蓮臥・滝見・施薬・魚籃・徳王・水月・一葉・青頸・威徳・延命・衆宝・岩戸・能静・阿耨・阿摩提・葉衣・瑠璃・多羅尊・蛤蜊・六時・普悲・馬郎婦・合掌・一如・不二・持蓮・灑水

これらの観音は、山ノ内では全部祀られている所は見られないが、魚籃観音や白衣観音などは、その地域によって特殊な信仰者が祀っているものがある。

六　十一面観音

十一面観音は、聖観音に対して変化観音の一つとして、広い信仰をもったものである。

この観音は、菩薩の第十地の修行を終わって第十一地の仏の位置に達したということで、十一面を表しているものとされている。しかし、特殊例としては九面のものもある。十一面あるものは、菩薩面が三面、瞋怒面三面、狗牙上出面三面と、大笑面一面に、頭頂に阿弥陀の化仏一面をつけている。手は二臂が普通で、右手には念珠を持ち、左手に蓮華を差した水瓶を持っている。

功徳として挙げられているものは、諸病を免れること、財宝が得られ、外敵を払い、水火難を排し、虫害や寒熱を被らなく、延命を受けるなどといわれている。この信仰は奈良時代からあったとしているが、石仏としては藤原期に入ってからである。また、独立像としては数は

とりで街道の観音（No.11）

多くないが、六観音の一つとしても見られる。

十一面観音は、千手観音と手が多いことから紛れやすいが、修験道に配された石仏の場合には、一応手は二臂となっているものが多く、その点で区別できる。

山ノ内町では、この十一面観音を単独に独立して祀られているものはほとんど見られないが、別掲の「峠の観音」や「とりで街道の観音」には多く建立されている。「峠の観音」では六体もあり、「とりで街道の観音」では、三四体の中に二〇体を数えるほど多く占めている。

大きさは、峠の観音の十一面観音は、一㍍以上のものもあるが、とりで街道のものは小型であり、平均五〇から六〇㌢のものが多い。

造立は、文政年間のものから昭和期に入ってからのものもあり、比較的新しい。

七　千手観音

千手観音は正しくは「千手千眼観自在菩薩」というもので、頭上には十一顔を載せ、千の慈手を持っている。そして、その掌（てのひら）の一つひとつに眼を持つのが正規であるが、実際には造形上千の手を造ることは無理であり、平安時代以降のものには、隻手四〇本と合掌した手の計四二本の像が造られるようになった。

一本の手は二十五有界の衆生を救うということから、四〇本で千界の衆生に慈悲の手が届くという考えからきているものである。千手観音は別名大悲観音、または蓮華王とも呼ばれており、京都東山区の蓮華院（三十三間堂）には、一千一体の千手観音が祀られていて有名である。

また、わが国では、西国三十三番札所や、坂東三十三番、秩父三十四番などの各札所では、本尊の大部が千手観音または十一面観音であるので、民衆の間には千手観音信仰がいよいよ広まったのである。

西国三十三所霊場の所在と本尊は、次の表のようになっている。

現在順位	寺名	本尊
1	那智山青岸渡寺	如意輪
2	紀三井山金剛宝寺	十一面
3	補陀落山施音寺	千手千眼
4	槇尾山施福寺	千手
5	紫雲山剛琳寺	十一面千手千眼
6	壺坂山南法華寺	千手千眼
7	東光山竜蓋寺	二臂如意輪
8	豊山神楽院初瀬寺	十一面

本　郷（No.23）

9	興福寺南円堂	不空羂索
10	明星山三室戸寺	二臂千手千眼
11	深雪山上醍醐寺	准胝
12	岩間山正法寺	千手
13	石光山石山寺	二臂如意輪
14	長等山園城寺	如意輪
15	新那智山観音寺	十一面
16	音羽山清水寺	千手千眼
17	補陀落山普門院	十一面
18	紫雲山頂法寺	六臂如意輪
19	霊鹿山行願寺	千手
20	西山善峯寺	十一面千手
21	菩提山穴太寺	聖観音
22	補陀落山総持寺	千手
23	応頂山菩提院	十一面千手
24	紫雲山中山寺	十一面千手
25	御嶽山清水寺	十一面千手
26	法華山一乗寺	聖観音
27	書写山円教寺	如意輪
28	成相山成相寺	聖観音
29	青葉山松尾寺	馬頭
30	巌金山宝巌寺	千手千眼
31	姨綺耶山長命寺	十一面千手聖観音
32	繖山観音正寺	千手
33	谷汲山華厳寺	十一面

この地域の「峠の観音」「とりで街道の観音」を参照されたい。

八　如意輪観音

如意輪観音という意味は、車輪が自由に転がって行くようにどこにでも現れて、衆生の六道での苦しみを取り除き、利益を与えてくれるということから出ている。

像容は、石仏のものでは二臂像が多く、また四臂像や六臂像も見られる。この造像が見られるようになったのは、江戸の中期以降である。この中、二臂像は、思惟像の姿をしている点などから弥勒菩薩と混同されることが多いが、近世になっての石仏の思惟像は、たいがい如意輪観音とみてよいようである。

思惟像は、右手の掌で軽く頬を押さえて立てた膝の上に臂（ひじ）を置き、左足は曲げて座っており、その上に左手を載せているといった姿が大部分である。仏像の中では、人間の姿に似た特殊な姿勢なので目立つものである。

また、一面六臂のものは思惟像であるが、第二手は胸の前で宝珠を持っており、第三手は念珠を下げているなど二臂とは変わったものである。

如意輪観音像の中には、十九夜供養塔とか二十三夜塔とあるのが見いだされるが、この場合、この塔を女人講で造立しているものが多い。中には如意輪観音が嬰（えい）児を抱いている例もあり、子安講と同じものと考えられている所もある。これには、その像が柔和な容姿で、女性的

上　条（No.62）

であるので婦人の信仰に向いており、お産の主尊として、また子育ての観音としての信仰にもつながっているのである。

なお、如意輪観音に関係する十夜講は関東地方に多く散在し、これと似通った十八夜講は東方地方に盛んであるが、ともに長野県にはあまり流布されていない。

山ノ内地方でも、十九夜講も十八夜講の塔も見いだされないが、隣りの中野市には十九夜塔が存在している。この講は、女人講で十九夜の月待講ともいわれ、十九日の夜に婦人が当番の家に集まって念仏し、花や水を供えて安産を祈願したり、育児の順調を祈ったり、女人が死後血の池地獄の苦を逃れるために行なうものとされている。そのようなことからみると、二十三夜講と極めて似通ったものであり、二十三夜の方に併合されたものと考えられる。

九　聖観音

この観音は、十一面観音や如意輪観音などの変化観音と区別するために聖観音といっているものである。人間の容貌（ぼう）と同じく、顔は一つで手が二本である。この名は、観世音菩薩、観自在菩薩というのが正式な名である。

観世音菩薩は、インドの補陀落山に住まれ、衆生の苦悩している様子を見、救いを求める声を聞いて助けに来てくださると信じられている。そのように衆生の願い事を聞くことから観世音といい、衆生に何事も畏（おそ）れない信念と信仰を与えるということから、施無畏者とも呼ばれる。

聖観音は阿弥陀如来の脇侍とされ、江戸時代には、西国、坂東、秩父などの三十三か所の観音霊場の本尊となっている所が多い。また、千手観音、十一面観音、准胝観音、如意輪観音などの六観音の一体ともなっている。

六観音は、平安時代中期ごろから浄土教が説かれるようになってから広まった六道輪廻の思想に基づいたものである。六道とは、六地蔵菩薩の信仰を位置づけたものでもあり、普通は次のように考えていた。

地獄道――千手観音を配す
餓鬼道――聖観音を配す
畜生道――馬頭観音を配す
修羅道――十一面観音を配す
人　道――准胝観音を配す
天　道――如意輪観音を配す

しかし、宗派によってその所属が一部分異なってくるものもあり、天台系では、准胝観音の代わりに不空羂索観音を加えている。また、

宇　木（No.23）

七体の観音を配して、これを七観音として祀っているのもある。

山ノ内町で聖観音の石造仏の数は一〇体で、その数は少ないが、不明のものを観音菩薩として入れておいたので、その数はずっと上回るものである。

建立年は元禄（一六八八から）年間のものや、宝永（一七〇四から）年間のときの古いものも発見されているが、何分磨滅が激しく像容のはっきりしていないものが多くあるのは残念である。

一〇　大日如来

如来ということばは、真如来生という覚者の異語で、大日如来のほかに釈迦如来、薬師如来、阿弥陀如来などが数えられている。その中で、大日如来は智を表す金剛界と、理を示す胎蔵界の二身がある。

前者は、白色五智という宝冠を被り、金剛界の名のごとく智徳堅固であって、一切の煩悩を破砕するといわれ、大智奉印を結んで結跏趺座の姿勢をしている。後者の胎蔵界の大日如来は、金髪髻の宝冠で、法界定印を結んでいる。このように大日如来は、納衣をまとうだけで、装身具をつけていない他の如来と異なって、菩薩形をとっているが、その意味は、如来、明王、天などの諸尊を総一する最高の地位を象徴するものとして、王者の姿をしているものとされている。

大日如来は、仏教的統一世界の主尊とされてインドで栄えたが、平安時代初期に日本に真言密教の主尊として太陽神との習合があり、天照大神と同一視されており尊ばれている。また、民間信仰では、大日如来は牛の守護神であるということから、牛乗り大日ともいわれている。

手の指を種々に結んで標識の意として内証を示す印相は、密教ではその基本形を六種拳と十二合掌としている。その主なものを挙げると、20頁のようになる。

山ノ内町地域は、中高地区を代表する霊山高社山（一三五二メートル）が近

菅（No.49）

智拳印
金剛界大日如来の結ぶ印。

法界定印
胎蔵界大日如来の結ぶ印。
坐像の釈迦如来の禅定印もこれ。

弥陀定印
弥陀如来が坐像で膝上に結ぶ定印。

説法印
弥陀如来が説法する時の印。

引接印（いんじょういん）
弥陀如来が臨終の衆生を仏の道へ入れる引導する形。

薬壺印
薬師如来が結び、薬壺を載せる。

合掌印
弥陀三尊の脇侍の勢至や地蔵などに見られる。

明王馬口印
馬頭観音が結ぶ印で、俗に馬頭印ともいう。

くにそびえ、古くから修験道が盛んな所であった。その影響から、大日如来信仰が広まっており、石造碑はこの地方としては古い寛文年間（一六六一～七二）のものが存在している。

一一　薬師如来

薬師如来は如来の部であるが、医薬の仏として諸仏の中で最も現世利益的な仏である。眷族（けん）として十二支をそれぞれ頭上に載せた十二神将が配されている。また、日光菩薩・月光菩薩を脇侍として、東方浄瑠璃世界に住するといわれている。

この仏陀は衆生救済のために、一二の誓願を発（おこ）し、迷いや煩悩を払い、病の苦悩を除いて息災延命を与えるといわれている。一二の誓願は、光明普照、随意成弁、施無尽物、安立大乗、具戒清浄、諸根具足、除病安楽、転女得仏、安立正見、除難解脱、飽食安楽、美衣満足の内容をさしている。そして、この十二大願にちなんで十二神将が眷属として配されているが、その神仏は次のようである。

十二支	本地	持物
子神	釈迦	三鈷
丑神	金剛手	太刀
寅神	普賢	宝珠・宝棒
卯神	薬師	斧
辰神	文珠	弓矢
巳神	地蔵	鉾
午神	虚空蔵	法螺貝（ほらがい）・鉾
未神	摩利支天	矢
申神	観音	宝珠
酉神	弥陀	独鈷
戌神	勢至	剣
亥神	弥勒	太刀

像形は、右手を上げて掌を外に向け、指先を伸ばして軽くあげ、左手を膝に屈し掌に薬瓶を載せているのが普通である。しかし、著名な薬師寺は方々にあるが、石仏としては案外少ないのが一般的である。

山ノ内町にも石造の薬師如来は数えるほどしかない。だが、温泉と医療と薬師如来の密接な関連からいって、薬師信仰は強く、渋には立派な薬師寺があり、霊峰高社山の山頂には、薬師の祠があり民謡に歌われているほどである。また、毎年五月八日をオヤヤクシの日として、村中で薬師さんのお祭りをするところが山ノ内町の現状である。

菅（No.38）

一二　地蔵菩薩・六地蔵

地蔵は日本では最も庶民に親しまれた仏さんの一つであって、大慈悲をもって劣弱者を救済してくれるという信仰がある。特に子どもとの関連が強く、子安地蔵、子育て地蔵、夜泣き地蔵などの名となって伝えられている所もある。

しかし、信仰当初からそうであったわけでなく、国民性となったものとのものが、そのようにさせたといえるものがあったからである。その一つとして、本来は如来の位にあった地蔵が菩薩となり、さらに声聞形となって円頂袖衣で現れ、右手に錫杖を持ち、左手に如意宝珠を持って、どんな所へも行って民衆の苦悩を救ってくれていると信じられたからである。

また、遊行神としての性格を持っていたと思われたこともその一つとして挙げられる。日本には古代から神の御子である大子（おおいこ）が一軒一軒

宇　木（No.69）

本　郷（No.11）

を訪れるというマレビト的な性格を持っていた神を考えていた。その姿のイメージ化したものの一つに地蔵が取り上げられたといってもよいのではなかろうか。

本来地蔵は、万物を生ぜしめるインド教の大地の神であり、最古の女神として疾病を治し、怨敵を降伏する力を持っているギリシア神話の大地母神とも関係があった。これが日本の民衆信仰の中核である山の神、田の神と類似があったからで、地蔵の一面にも通ずるものがあり、田植え地蔵、泥足地蔵などの伝説として残っている。また、あの世とこの世の境にいて、罪ある者を助けてくれるということは、道を守ってくれる道祖神信仰とも通ずるものがあった。

しかし、日本の民衆の心を支配した最大のものは、六道輪廻の思想との関係であった。それは、人間は地獄・餓鬼・畜生・修羅・人界・天界の六道の輪廻から免れられない業を持っているとし、その苦から離脱させて菩薩の道に入らせるために、地蔵が六変化をもってそれぞれの六道に臨んで衆生を助けてくれるというものである。六地蔵はこのようなところからできたもので、この信仰は中国の唐代で既に訳になった『地蔵本願経』に出ているものである。

山ノ内町の石仏の地蔵尊も、現在分かっているものが数多く、独立尊で七一体、六地蔵が二一体の多きに及んでいる。所在地は、寺院の境内や墓地にあったり、村はずれの辻などにあるのがその特色である。地蔵の名前に、俗称のついているものもその特質で、それが伝説に付随しているものが大半である。

一三　弥勒菩薩

弥勒信仰は、飛鳥時代には既に思惟像として弥勒菩薩が造られており、わが民族の信仰にいろいろな面で影響の大なるものがあった。たとえば富士教との関連もあり、世直し的なミロク信仰があり、水神と弥勒の出現との関係なども挙げられる。

柳田国男は、『海上の道』の著書の中で、「みろくの船」として、常陸の鹿島の弥勒踊りを取り上げ、平安朝後期の政治の紊乱や、戦国時代の争乱から抜け出させるために、東海上から弥勒の船が来て、稲作の豊熟を示す米を撒き散らすといった奇瑞を挙げている。

弥勒は、兜卒天に住み、釈尊死後五十六億七千万年後に、仏としてこの世に生まれて、釈尊の代わりに衆生を救うといわれている。その浄土兜卒天は、密教においては東方の北端にあてられているので、鹿児島の海からすれば、東海の日の出の彼方に浄土を見ており、そこから船に乗って東海上をやって来るとの現実的な信仰に連なったものである。

このように、常陸に根づいた弥勒信仰は、平安後期には全国に広まり、山ノ内町でも湯田中には大治五年（一一三〇）に、等身大の地中湧

渋（No.41）

出を思わせる石仏となって現れている。

大治五年というと、崇徳天皇の代であり、今から約八六〇年以上も前の極めて古いものである。恐らく県下では造銘ある石仏としては最古であろう。

その品格としても、温厚、慈愛、従容感のあふれた気品を持つ芸術的な石仏であるだけでなく、藤原時代後期のこの地域にあった金倉井御牧の支配に関係あるものとも思われる歴史上の貴重な資料でもある。

一四　不動明王

不動明王は、大日如来の変化とされ、諸種の明王の総主とされている。その容姿は肥満型で色が青黒く、頭髪はちぢれ毛で一部編んで左肩に垂らしている。左眼は閉じ、右上唇をかんで火炎をバックに忿怒の相を表している。また、右手に利剣、左手に方便自在の搏索（なわ）を握り、火の神としての信仰を受けている。

須賀川（No.127）

前　坂（No.16）

不動明王の名は、この火生三昧に入って一切の罪障（ざいしょう）を打ち破り、動揺しないというところから出たものである。

このように他の仏と異なった様相をしているのは、階級社会の厳しいインドの下層社会の被征服民から出自したことを物語るものであり、一般民衆の諸種のけがれを払い、煩悩を伏し、悪魔を圧服してくれ、長寿を与えるものと信じられている。しかも、その対処のしかたが、済度しがたい者には威力をもって仏道に導くといわれ、半面行者には擁護して悟りを得させる。したがって、中世以降日本では修験者が専ら大日如来の使者となった不動明王を主尊としており、不動明王の代弁者をもって任じていた。

江戸期に入ると、民間信仰として各地で個人的な信仰のほかに、多くの不動講がつくられ、千葉県の成田の不動尊に参詣することが盛んになった。また近くでは、須坂の米子の不動さんに行く者も多かった。

一方、修験者の行の中の柴灯護摩は、正月のドンドン焼きの火祭り

に関係し、乗物によって空中に示顕するという不動を、磨崖仏として祀る特殊な祭祀もはやらせた。

山ノ内町にも、北部の山地の嶮阻な山路の崖の中程に磨崖不動明王が一基存在し、土地の人も厚く信仰している珍重なものがある。しかし、全体とすればその数は少なく、八基を数える程度しか判明していない。

一五　山の神・阿夫利神社

山の神を大山祇命（おおやまつみのみこと）としたり木花開耶媛命（このはなさくやひめのみこと）としている所が多く、そこでは大山祇命はイザナギの命、イザナミの命の子どもであるとし、開耶媛命は大山祇命の娘であるといっている。これらの説は、神社神道から出たもので、『記紀』の記述を根拠にしたものである。そして、大山というのは伯耆国（ほうき）の大山（たいせん）のことで、ここに住む神が大山祇命として、山の神の代表としている説もある。

菅（No.99）

しかし、伝承による山の神の性格づけは多様なものがある。その中で、正反対としていわれているものでは、山の神が男であり、武力によって神を助けたとする猟師仲間の言い伝えに対して、山の神は女性で、その出産を助けた女の神が山の神になったといわれている地方も多い。それ以上に、もっと俗説に近いものでは、山の神は女神で、一年に一二人の子どもを産むとされ、山の神が十二沢や十二様などの地名となって残っている所もある。また、十二様の名は、一年の一二か月を司るところから名づけられたとする説もある。所によっては、山の神は天狗のようなもので、人間に圧力をかける妖怪に近いものであるともいっている。

江戸時代に入ると、相模の大山を関東の中心として、大山講とか大山石尊講という講がつくられて、この山を祭場とし参詣する人々が多かった。長野県でも、石尊大権現の塔や、阿夫利神社が祀られたが、元来大山は一名雨降山（あめふりさん）とも呼ばれていて、降雨のご利益があるといわ

沓　野（No.2）

れ、干天が続いたり雨のほしいときには、農村では雨乞い祈願をするほどであって、水神として祀られていたものである。

このような講がない所でも、山の神に関した年中行事では、年頭に初山入りをしたり、春秋二季に定期的に山の神祭りを行なう所がある。この日には弓矢を作って供えたり、赤飯を上げたりし、山に入ってはいけないとされている所が多い。

この地域の山の神の石造は三三体を数え、多い方の部類に属している。志賀高原や高社山に関係した仕事をする人が多いことからきていることはもちろんであるが、山岳信仰に基づいて広まったこともある。それが原因か速断はできないが、山の神の本体は石碑のほかに石の祠になっている所が多いということが特徴として挙げられる。

一六　秋葉大権現

全国至る所で広く信仰されている秋葉大権現は、その本社は静岡県周知郡春野町の秋葉山にある秋葉神社である。火伏せの神として木造建築で火災の多い日本には、特にこのような信仰が迎えられた。この祭神は、古くから名を表している火之加具土神で、『古事記』にも語られているものである。

また、京都に本社のある愛宕神社の愛宕権現も火伏せの神として祀られているが、これは同一の信仰を持たれているものである。

しかし、秋葉山の方は修験道が中心で、この面に活躍した三尺坊を祭神としてこの山上近くにある秋葉寺に祀っており、秋葉講として関東・東北に広く信仰されている。特に長野県では、山伏の三尺坊は信州の出身であり、戸隠山で修行したといわれて県内の各地では、村境の高い台石の上に、石祠や木製の殿社が建てられているのが目立っている。

本　郷（No. 8）

同じ火伏せの神として、飯綱・金毘羅・愛宕が同一の性格のものであることからすると、その根源は山伏の天狗信仰と習合しているともいえ、ある面では狐神に関連を持っていることが分かる。飯綱の飯綱使いの狐の活躍や、火伏せの天狗の羽団扇などは、そのような関係から出ているといえる。

三尺坊の流行は、貞享二年（一六八五）には最盛を示したが、幕府は一種の邪教であるとして禁止するようになり、飯綱使いは狐憑きの迷信とされるようになった。

この地域の秋葉信仰は、山間地や平坦地に平均して広まっていたようであるが、近隣の他町村では平坦地に多い傾向である。火災予防を目的とした点からいうと当然の現象であるが、一方山間地にも広まっていることは、修験道のこの面での活躍が見逃せないものがあるものと思われ、今後の研究の余地があるものといえる。

一七　稲荷大明神

一般に考えられてきている稲荷の神は、『古風土記』などに出てくる帰化人の秦氏の氏神とされている「伊奈利」として、稲を背負った老翁の姿をしているものとされている。したがってこの神は、稲魂の神格化された作神とみられていることが多い。

これが所によっては、地主神となったり、祖霊とされて産土神として祀られており、また広く屋敷神となっている所もある。さらにこれが後には都市では商工の神となり、漁村では漁業の神とも変化してきている。

稲荷神社は、全国的には本社とされている所は、京都の伏見稲荷や、静岡県の豊川稲荷、茨城県の笠間稲荷などで、広い信仰圏を持っている。

特に京都の伏見稲荷大社は倉稲魂神を祀り全国稲荷社の総本社として知られ、八幡社・諏訪社と並んで分社が多く、三万を超すといわれている。

沓　野（No.6）

これらの稲荷社は赤い宝珠を口にくわえたり、尾に巻いたりしている狐を社頭に祀り、赤い鳥居や赤旗が立てられていて、一見して稲荷社であることが分かる。この赤く統一されているのは、宝珠は火焔の玉を意味しており、邪悪を焼き払うという威力を持ったものであることからきているのである。

狐の魔力は、計り知れないもので、厚く祀らないと祟りをなすという俗信から、全国的に静岡県のおとら狐、木曽の管狐、中国地方の犬神などが恐れられている。これらの狐は、人に憑くといわれて敬遠されたが、その半面、昔から特別飼育して占いや呪術に使っていた狐使いもおり、これを陰陽師などは大事にしていたほどである。

この地域の稲荷社は、数は少ないが、それぞれ厚く信仰されており、神社格に近い規模を持っている。しかし信仰内容は、蚕神としての作神の傾向のほかは、商業的な神として信じられている要素が強い。したがって、山間地より平坦地に多く、特に町化した場所に祀られている。

一八　戸隠大権現・九頭竜大権現

北信五山の一つである戸隠山は、その厳しい山容と高山から、他の山に比べて特徴があるだけでなく、天の岩戸の神話などによって全国に早くから霊山としてその名が知れ渡っていた。平安時代には、作神としての効験あらたかな神として、また風水の神として崇められ、鎌倉時代には三院組織が確立し、三三窟の修行場が整備されるほどになった。　さらに、「戸隠三千坊」といわれて、室町時代のころには有数

須賀川（No.69）

な修験道場として全国に知れ渡った。これが江戸時代に入ると、守護不入の権威をもって一山一千石を支配するほどになっている。　この戸隠の奥社には、九頭竜権現が祀られているが、九頭竜というのは、数多くの支谷からあふれ出て本流を大洪水に巻き込む姿の象徴として、水の暴威を神格化したものである。これが後には、この水の暴威を鎮圧する神徳を持った神としての九頭竜権現となった。この権現は、水害を防除する効験があるだけでなく、干天に際しては雨乞いの神ともされた。

戸隠の九頭竜は、この地に伝わる鬼女紅葉の鬼女や、巨人伝説のダイダラボウなどの怪異の魔性があるものと思われており、その威力はたいへんに恐れられていた。戸隠の民俗伝説では、九頭竜は夜半丑の刻ごろに現れて、あたりの熊笹を食べ、害虫を駆除してくれたといわれており、それによって九頭竜さまの歯の跡が笹についた。これを「お歯の跡の笹」といって、田畑にさせば害虫が発生しないといわれ、作神として信仰され参拝者は、この笹を取って帰っている。

山ノ内地域だけでなく、北信一帯には戸隠講が古くから広く行なわれており、戸隠神社の崇拝は厚かった。山ノ内町でも戸隠大権現を祀った石塔のほかに、戸隠神社の天台派の中興の祖として尊敬された宣澄という人を祀った宣澄社が二か所もある。そのいわれは不明になっているが、とにかく古くから戸隠神社とのつながりが深かったことが分かる事例である。

一九　金毘羅大権現

金毘羅信仰は、香川県仲多土郡琴平町の金毘羅宮が総社である。現在の祭神は、大物主神で、相殿に崇徳天皇が祀られている。

金毘羅という語は、サンスクリットでクンビーラといい、ガンジス川の鰐（わに）の神格化したものである。本地垂迹説の影響を受けて金毘羅権現と称するようになった。

金毘羅信仰の高まってきたのは、大体室町時代初期以後で、海運業が盛んになり、海上の安全を祈ることが多くなってからのようである。それに加えて豊漁を願う漁業関係者などの海上生活者にもその信仰が広まり、近世以来各地に金毘羅講がつくられて、金毘羅参りが盛んになった。

しかし、金毘羅信仰を地方へ伝播させる力になったのは、金毘羅道者といわれる行者であった。道者は、大きな天狗面を背負って、全国各地を回って布教に努めた。各地の金毘羅さんに天狗面が奉納されているのは、そこからきている。

その結果一般庶民の信仰圏はほとんど全国に及ぶようになり、讃岐の金毘羅参りは、見物旅行を兼ねて江戸時代には隆盛を極めるようになった。

前　坂（No.19）

また、金毘羅大権現は歴代皇室の尊敬を受けており、明治維新までは毎年春秋に宮中より御撫物（おなでもの）が当社に下賜され、宝祚悠久の祈願を行なわせている。

山ノ内地域では、公的に建てられている金毘羅の石造物の碑祠はわずかであるが、屋敷神として祀っている家は、相当数にのぼるものと思われる。

二〇　飯綱大権現

飯綱信仰については、天野信景の『塩尻』に「陀祇天也。我国の神に非ず。奥州仙台飯綱山に祀れば飯綱三郎といふ。遠州秋葉山に祀りて三尺坊といふ。讃岐の金毘羅、京都の愛宕山等にては又其名を異にす」とある。仙台は信濃の記憶違いであるにしても、同じ火伏の神である秋葉・飯綱・金毘羅・愛宕が一つの根であり、山伏の天狗信仰である。

飯綱と秋葉は荼枳天（だきにてん）、すなわち狐神と習合して狐に乗り……その根底には、それぞれ天狗の羽団扇からきた火伏せ信仰が共通している。殊に飯綱は「飯縄使い」と称する狐使い妖術者の人形使いの法があり、民間の狐狸（こくり）様にも似ていて近世に多くの信者を得ている。

このように、飯綱社は古くからその威力が恐れられており、応仁の乱のころには、細川政元がイズナの法に長じていたといわれ、上杉謙信は鎧に飯綱大権現の旗を立てていたといわれるほど、このころの武将の間には信仰されていた。そして、飯綱山は戸隠山の前山として、早くから真言宗の修験者が道行に入っていた所であった。

飯綱山は、山ノ内地域からは北信五山として、斑尾山・妙高山・黒姫山・戸隠山と並んで眼前にその雄姿が眺められ、親しまれてきた山である。そして、信仰的には狐使いとして、コックリさんといわれて子どもの遊戯にまで入り込んでいたほどであるが、石塔やお宮を建てて信仰する風習は少なかったようである。あるいは、戸隠信仰に吸収

須賀川（No.72）

されたのかもしれないが、北信一帯の傾向の一つでもあるといってもよいのかもしれない。

二一　皇大神社

天照大神は皇大神宮の神として、皇室の祖神として祀られてきたが、殊に明治以降の国家神道が強まってきてからは、至高神として全国民の崇敬を集めた。しかし、鎌倉時代には武家の間でも至高神として考えられていたようである。

皇大神社を民間で神明社というのは、神明の語は中国では神と同義語で、天照大神は神明の中の神明としての大神と考えたからである。全国的に神明社が数多く勧請されたのは、戦国時代末ごろからで、伊勢神宮の神主や御師（下級神職）の活躍によって移された「飛神明」のことがあったからである。

御師は地方に出張したりして檀那と呼ばれる信者に、お札や暦、大麻を配布して、家内安全、五穀豊穣などの祈願を行なった。一方江戸時代には、庶民の間に流行した伊勢参りの案内をしたり、宿坊の世話もした。

「飛神明」の信仰は、祭神が至高神であるというだけでなく、国民に農桑の道を教えたことや、豊受大神を御饌都神として外宮に祀っていたことにも由因している。

天照大神の信仰は、伊勢社や神明社のお宮としてのものは少ないが、一般に著名な地方の神社や、村の産土神に天照皇大神として合併されているものが多い。山ノ内地域にあっても同様であり、祭りのときには獅子舞いは伊勢の代神楽系のものを舞う所がほとんどである。代神楽とか大神楽とか太々神楽といっているのは、伊勢の神楽のことをいっているのである。

そして、苦労な経済状態の中からお互いに金銭を出し合って、代表に伊勢参りをしてもらう代参講も、伊勢信仰の熱意が一般にあったから実行できたものである。

須賀川（No.82）

二二　猿田彦命

猿田彦命は、『古事記』に天孫降臨の際に、その先導として道案内をしたという記録もあり、国津神としての信仰を持たれた神である。

石造の神としては、県内では中信などに猿を伴って、天鈿女命と並んだ道祖神として祀られているものもある。また、猿田彦の猿が、えとの申と通ずるところから、庚申塔として建てられている所もあり、単独に猿田彦命と文字で彫られた石塔は、道案内として祀られているなど、その信仰は種々に分かれている。

湯田中（No.18）

また、猿田彦命は、海人族の祖であるとしたり、南方的要素の強いところから、太陽神であるとともに、農耕的性格の濃いところが農村において農作の神としても尊ばれている。これらの要素が、一部天狗の信仰と習合するに及んで、村祭りの神楽や獅子舞い等の民間祭事芸能に、シメ切りをはじめ天狗の舞いとして登場するなど、民衆との結合は深いものがある。

山ノ内町の猿田彦命の石碑は四基であるが、全部文字碑であり、道の神として信仰されているものである。

二三　聖徳太子

聖徳太子の像容は、二歳の南無太子像、一六歳の孝養像、壮年期の摂政太子像、衣冠束帯像、馬上太子像などがあるが、近世の石像はほとんど孝養像である。文字碑としても多く祀られているが、碑銘は「聖徳太子」または「太子供養塔」などで、造立は江戸時代中期ごろからである。

信仰者は、大工・左官・畳屋・鍛冶屋・屋根屋・鳶職などの建築関係の者や、桶屋・木こり・木挽などの広い範囲に渡る職人である。たいがいこれらの者は、その仲間で太子講をつくり、一年に何回か講を開いて聖徳太子の掛け軸を掛けて供養し、飲食を共にして、賃金の協定や仕事についての申し合わせをする。

聖徳太子は、推古天皇の摂政となって政治に仏教思想を取り入れ、十七条の憲法などの制定をして政治改革を進め、学問・芸術の振興を図った。また自ら法隆寺を建設したり、『三経義疏』を著作したりして仏教の興隆に努めた。

太子が建築関係者や、木こりなどの技術者に崇拝されるのは、寺を多く建立したり、造仏をすすめたためだとされている。

聖徳太子を祀るのに、太子堂などを建てている所が近隣町村にはあるが、山ノ内町のものは石碑である。しかも時代は新しいものである

須賀川（No.41）

が、大石で立派なものである。

二四　弘法大師

庶民は神仏を信仰するほかに、高僧を崇敬することが昔からこれに劣らないものがあった。弘法大師に対してもその例である。

大師は、平安時代初期に入唐して仏法の教理を究め、帰朝して密教を広めて真言宗の開祖として人々に敬仰された。その教えは従来のものと異なり、呪法・加持などによって大日如来の真理を衆生に体得せしめた。

その足跡も広く、各地に大師の奇瑞をたたえた弘法清水、弘法栗、弘法杉などの伝説として残り、特に十二月二十三日ころを大師講として、大師を祀る風習となっている所が多い。しかし、日本の民俗学では、この大師は若御子であるところの大子に関するものであることを定説としている。

宇　木（No.30）

だが、四国の八十八か所の霊場が、大師ゆかりの地として崇敬されている例は現在も生きており、大師像が祀られているほどである。その像は、ほとんど大師は網代笠を深くかぶり、背に荷を負い錫杖を持った立像で、四国以外にもこのような立像は全国至る所に見受けられるものである。

山ノ内町のものは四体挙がっているが、座像あり、石碑に浮き彫りされているものありで種々である。

二五　水の神・弁財天

日本では水の神としては、水分・琴平・水天宮・住吉などに祀られているが、この神が舟路の安全を祈る神社となっている例は、全国各地に見られる。その由因は、海人族や安曇族との関係などがあるといわれ、日本民族と海・川との関係、我々の祖先と水との関係につながるものである。

これは、その根源にもかかわると思われる、祭事における禊や祓などの行事が、水の大事な性格からきているものであることも見逃せない。そして水神は、水の精の神や雨乞いの神、水除けの神、龍神など、広範囲に祈願の対象として広がり、俗説の河童などにまで及んでいる。

これら水の神の庶民の信仰対象の代表的なものとしては、弁財天が挙げられる。弁財天は、「弁天さま」とも呼ばれており、もともとはインドの河の神の化神として崇敬されていたが、後には仏教に取り入れられ、音曲の神となったり、戦勝を導く神や、知恵・福財・延命の神にもなった。

民間で行なわれている巳待講は、弁財天を主神とするが、これは己

宇　木（No.37）

巳の日に決めている所が多い。巳待の巳は、蛇に通ずるところから蛇神が水の神に結びつき、弁財天を主神とするものになったのである。

講だけでなく、屋敷神としても、これを祀る者がこの地域では案外多いのも、直接利益に関係するこの神の由来を現している。日本的には、江の島の弁天さんなどは美人としても有名であり、福徳神の性格として七福神の一員にも加えられている。

山ノ内町の水神は、弁財天として祀られているものが多く、川の縁に祠として建っているのが見受けられる。

二六　狛　犬

狛犬の狛も犬の意味であるが、本来はおおきないぬに犬の字をあて、小さな犬に狗の字を使った。方々に見られる神社の拝殿前に置かれている狛犬は、唐獅子といっているものに近いものが多い。

しかし、地方によっては狼に近いものもあり、これを「お犬様」と呼んでいる所もある。

狛犬の歴史は、もとはインドに発生し、これが中国・朝鮮を経て仏像・仏具が渡来したときに一緒に日本に伝えられたものである。特に朝鮮には、狛犬の祖形のようなものがしばしば見られ、日本でも狛犬は別に高麗犬・胡麻犬とも書かれている。この獣像は、悪魔を除去する力があると信じられている。

その様式は大きく分けて、唐朝様式と宋朝様式とに分かれるが、右側に置かれるものは口を開いて阿を表し、左側のものは口を閉じて吽を意味している。すなわち、人の出生と終焉を表現したもので、密教では阿は出る息で万物発生の根元とし、吽は入る息で一切智徳の帰結としている。この阿吽の形は、寺院の仁王門に見られる仁王像にもなるので、仏教の守護神として安置されている。日本で狛犬の現存する最古のものは、鎌倉時代で、東大寺に伝えられている。

山ノ内町の五体は共に新しいもので、年月のはっきりしているのは

上　条（No.52）

みな昭和に入ってのものである。

二七　石燈籠・常夜燈

石燈籠は常夜燈の役目をするもので、法会を行なうときの浄火が目的であった。日本では奈良時代に百済から伝えられたといわれており、献灯する施設であった。

密教では、六種供具の一つとして大切であったが、室町時代後期からは装飾的な要素が強く含まれ、神前用形式の石燈籠が現れ、江戸時代中期以降には庭園用となって普及された。

本来は火の持つ浄火力と、闇を照らして社寺を聖域化するものであった。構造は古くからあまり変わりなく、頭に宝珠を乗せ、請花で支え、その下に笠石を広く張り、次に石燈籠主体の火袋、中台竿の順序になって、一番下を基石で固めている。中には、これが変化して一本の節のある竹のような形のものもある。

戸　狩（No.31）

山ノ内町の常夜燈は三〇基近くもあり、建立年も古いものは元禄時代にさかのぼり、以後昭和の年代まで続いている。形態も神社境内の年代の新しいものは立派であり、山中の道標的なものは、自然石で燈籠の形に似通った風流なものもある。

二八　供養塔

供養塔は、本来的には供養のための造塔であり、仏教の教義にはささいなものであっても、造塔の心が菩薩に連なると説かれている。したがって、ここで扱う石造物は大極的に見ると、すべてが供養塔の範疇に入るわけである。しかし、その心願の目的の相違によって対象が異なり、種別名称がつけられてくる。

塔は、元来インドのスツーバということば（釈迦の骨―舎利―を埋めた上に、伏鉢型に基壇を盛り上げた塚の類）が音訳されたもので、これが中国に入って卒塔婆や塔婆に変化し、塔になったといわれていて、日本にも古代には造塔が行なわれていた。これが近世になると、造塔供養は庶民の中にも広がり、特に有志が結集してつくった宗教的な講の事業として塔を造ることが盛んになった。

江戸時代などには、凶年のときなどに念仏講信仰が盛んになり、寺院の建築や造塔に力を入れている。ただし、本来的な供養のためにする一方に、記念碑的な造塔者の心意を供養塔に託して建てられるものも多くなった。ここで挙げたものも、供養のための供養塔のほかに、写経供養塔や読誦供養塔や廻国供養塔などは、多分に記念的なものとして取り上げられるものでもある。

山ノ内地域でも、廻国供養塔は三六基あり、写経供養塔と読誦供養

佐　野（No.76）

塔は合わせて二四基も建てられている。その各々については、別項を参照してもらいたい。また、何の目的のための供養塔かはっきりしないものは、「その他の供養塔」として取り上げた。

二九　六字名号碑

六字名号碑は「南無阿弥陀仏」と記した碑ということであるが、徳本名号塔といっている所もある。この念仏を全国的規模で普及に導いたのは、徳本上人であった。

徳本上人は、宝暦八年（一七五八）に紀州日高に生まれ、天明四年（一七八四）に出家してから浄土の仏門に入り、二十余年も山中にこもって修養した。

その間、寛政年間三〇歳のころから六か年を大和吉野の山中、紀州須が谷山頂で難行苦行の仙人生活をして修験的な能力を体得している。これが後に徳本上人と人々にいわれたゆえんである。

文化一三年（一八一六）、上人は諸国布教の旅に出たが、各地に念仏講を創成し、行く先々で木版刷りの名号を配布した。『甲子夜話』という本には、布教の様子を次のように記している。

「世に徳本流の念仏を修するを見るに、いと巨大なる木魚に大なる伏せ鉦を置きて、信者相集まって彼木魚と鉦とを乱調に打扣きて、異口同音に念仏す」。

とある。上人は、県内では北信へも広く足跡を残しているが、ゆかりのある地では、徳本上人の印刷した特徴のある字の「南無阿弥陀仏」を石碑に刻している所がある。

山ノ内町にも、徳本上人流の字を石に刻した立派な名号碑が一〇体近く存在している。

菅（No.55）

三〇　三界万霊塔

三界は、法界とも十界ともいわれているものと同じで、欲界・色界・無色界に分けており、生死流転する迷いの世界をさしている。

この塔は、造塔が目的でなく、回向することによって万霊を供養するというものである。したがって、常に多くの人々から回向を受けやすい寺院や墓地に建てられているものが多い。碑文に「三界万霊等」と書かれた「等」の字は、「塔」の俗字である。

そして、このような思想は、すべての万物には、仏性が宿るとする空海（弘法大師）の「ほろほろと鳴く山鳥の声聴けば父かとぞ思う母かとぞ思う」と歌った考えからきているものである。したがって、このような思想から、有縁無縁の遺骨を合祀して三界万霊塔としているものが多く、無縁仏にもつながっており、さらに鳥獣供養塔のようなものになっているものもある。　この塔は、歴史的には鎌倉時代初期には、既に「三界万霊十方至聖六親眷属七世父母」とか「三界万霊六道四生七世父母六親属等」と書いたものがあり、後に「三界万霊塔」と簡略化されたものとされている。

戸　狩（No.52）

山ノ内町のものは、角柱に近いものであるが、デザインは全国各地のものはそれぞれ趣向を異にしている。

三一　写経供養塔・読誦供養塔

聖徳太子の十七条憲法の二に「篤敬三宝、三宝者仏法僧也……」とあるが、この中の法は教典をいっている。仏教では、この経典を書写することは仏法に通ずる最も有効な道で、大きな功徳のあるものとされていた。

また、写経までいかなくても、読誦することは、個人としての供養法では尊いものとされていた。そして、これは容易であったので広く行なわれており、一定の目標を達したときには、記念に造塔する者もあった。その造塔には、だいたいこなした巻数や部数を明記することがその特色であった。特に写経のこの業績では、平安時代の後期には、永年保存を願って経塚に写本を埋納することが盛んであった。

近世に入ってからは、経文を小石に一字から数文字を一石に書き、地下に埋納してその上に塔を建てることも行なわれた。経文はこの地域のものは法華経関係が多く、法華千部と書いた写経記念の塔は四基を数えている。その他、「妙典千部」「大乗妙典」などと刻まれているのも法華経関係である。一方、般若心経関係もあり、「心経十万遍」とか、「心経一万遍」などの読誦記念のものもあり、写経・読誦の塔は山ノ内町には分かったものだけでも二四基の多きに及んでいる。

三二　廻国供養塔

日本全国の六十六か国の代表寺院や、一の宮に法華経六十六巻を書写したものを、一巻ずつ奉納する廻国巡行は、江戸中期ごろから盛んに行なわれるようになった。

その基因は、鎌倉時代中期からで、西国三十三番札所めぐりや、次いで起こった坂東三十三番札所めぐりが先行していて、それに刺激されたものであるが、廻国巡行として広まったものは、それらの観音札所に限られなかった。

この巡行者を六十六部とも六部ともいったが、正しくは六十六部納経の意味である。そして、納経する経文は法華経だけでなく、阿弥陀経・弥勒経・般若経などもあった。

廻国巡礼者の服装は、六部笠をかぶり、厨子を背負って、山伏風の衣を着て一見して六部と分かる姿をしていた。このような巡礼者には、昭和の初期ごろまでは、沿道の家では飲食を布施したり、中には宿を貸したりする者もあった。しかし、巡行者の中には、六部の名を騙(かた)って悪事を働く者もおり、警戒されたり、凶悪な行状をした伝説となって語り継がれていたものもあった。

この地域では、廻国をした人がその記念に供養塔を建てたものも多く、三六基に及んでいる。その銘文で分かるのは、西国・坂東・秩父の百番を巡礼したものが多く、また中には出羽三山や富士山登山のものもある。ただこれと書写供養塔の区別が判然としない。

前　坂（No.9）

沓　野（No.22）

三三　五輪塔

五輪塔の源流説は様々である。インドの卒塔婆からきたというものや、舎利（仏陀・聖者の遺骨）を安置する塔を中心としてできたなど定説がない。

横　倉（No.21）

しかし、五輪が大日如来を本尊とする供養塔として発展したものであるということは確かで、五輪の各部には大日如来の真言「キャ・カ・ラ・バ・ア」が刻まれている。

石塔の様式は、上部から空・風・火・水・地の各輪を表す宝珠・半月・三角・円・方形の五部分からなっているのが一般的であるが、中には一石で造った一石五輪塔や、最下部を長くしたものもある。

わが国の五輪塔の最古のものは、平安時代の仁安四年（一一六九）までさかのぼれるが、県内のものは鎌倉時代に下がり、室町時代には墓碑として多く造られるようになった。そして、それ以前のような大型のものが少なくなり、個人の造立に移される傾向になってきている。この五輪塔を信仰内容からみると、六道講衆、大念仏衆、千部経結衆、薬師講衆などの信仰と結びついたものが目立っている。

山ノ内町にある五輪塔は、形をなしているものは二五基に達しているが、その一部だけ発見されているものも入れると相当数に達することが分かる。保管についても、墓地にただ転がしてあったり、個人の墓石だったと思われるものもあって不明なものも多い。

三四　宝篋印塔

宝篋印塔については、宝篋印陀羅尼経に「この塔に一香一華を供え、礼拝供養すれば、八十億劫生死重罪が一時に消滅し、生きている者は災害から免れ、死後は必ず極楽に生まれかわる…」といった有り難い功徳が説かれている。

一般に塔内には、宝篋印経や宝篋印陀羅尼経などの経典が納められており、過去・現在・未来にわたるすべての仏菩薩を奉蔵しているといわれている。中国から日本へは平安時代に渡来して来たといわれているが、大型の石造物として造られるようになったのは鎌倉時代に入ってからである。

当初は経典供養塔としてのものが主であったが、鎌倉時代の後期以

戸　狩（No.25）

降は墓標としても造られるようになった。その様式は、地域によって多少異なるが、基本としては、基壇・塔身・笠・相輪の四部分からなり、塔身が本尊を意味する。相輪を除いて、すべて方型なのが基範的なものである。

しかし、形態は大別すると関東型と関西型になる。関東型のものは、反花座の下の二区に分けられた枠内に、格狭間を彫り出しており、関西型のものより遅れて発生している。関西型のものは、基礎も簡素で反花座・格狭間は初期のものには見られないのが普通である。

この地域にも、宝篋印塔は墓地にたまたま見られる。概して中型のものであるが立派なものが多い。

三五　霊神碑

霊神碑は、木曽御嶽山の信仰を中心としたものである。最初の碑としてのものは、嘉永三年（一八五〇）に御嶽講の講祖といわれた覚明行者の追福のために信徒が建てたものとされている。このときの碑名は「覚明大菩薩」または「覚明神霊」と刻まれている。

しかし、その前身と考えられるものに、弘化三年（一八四六）に国学者の中里作右衛門という人の門弟が結成した御嶽信者の巴講によって建てられたものがある。これが「霊神」と記した碑の始まりであるといわれている。そして、明治以降の神道優位の国策が、御嶽行者の死後の号を「霊神」に一本化してしまった。

それ以後、各地の御嶽祭場の神社の境内には、大きな霊神碑が多く建てられるようになり、殊に木曽御嶽山の霊場には、この碑が林立している所が見られるようになった。

木曽の御嶽山は、古代から修験者の道場として国内に知れ渡った霊山であった。行者や参詣者は、年中群れをなして入山している。殊に修験者は峰入りの回数によって階級が決められており、その修行によって、ある種の神技と能力を体得して、上位に進むことができた。これによって、庶民からは信頼され、祭事の司祭や村のもめ事の相談に当たった。

沓　野（No.12）

そして、山入りは早いころから行なわれたが、信者の碑が建てられ始めたのは、覚明行者の例のように、近世も末期になってからである。

山ノ内町に存在する霊神碑は一五基の多きに達しているが、特に上林の中正講社の境内には大型の立派なものが集中している。また菅の不動社にも数もこれを超す立派なものが建てられている。

三六　筆　塚

筆塚は、別名を毫塚とも退筆の碑ともいっていて、これを碑に彫る

佐　野（No.14）

こともある。毫は筆の意味であるが、元来筆塚は使い古した筆具に感謝の意を込めて地に埋めた供養塔または供養塚のことである。ちょうど針供養と同様の意義のものである。

この筆塚は、江戸時代の後期以降になると、寺子屋の師匠を顕彰する碑にもなっている。寺子屋では、生徒を筆子といい、師匠は、村の僧侶・神官・修験者・浪人・医師などが圧倒的に多く、次いで富農・富商の学問に優れた者がなった。手習いをはじめ、読み、書き、そろばんが主で、場所は寺院または師匠の自家を開放してあてた。

筆子は、一年に何回か決まった期日に、幾らかの束修（そくしゅう）・謝儀を払った程度であるが、師弟間の情は深く、人生観にも影響したほどである。

山ノ内町では筆塚が二六基に及んでいるが、このように多数の所はあまり例がない。筆塚が多いということは、その地域が学問を重んじ、人情の豊かさを物語るもので崇敬に値するところである。

三七　頌徳碑

その人の功績や、人格・徳業をたたえ、尊敬の念を表した碑で、一面から顕彰する意味も含まれているものである。碑文の中には、その人の業績を記したり、その人の歌や俳句などを彫ったものもある。

この碑は、その人が死去してから建てられるのが普通である。中には、その人の家の庭などに建てられているものもあり、筆塚に類似した性格のものもある。

山ノ内町にある頌徳碑は、筆塚と同様にその数が多く、三一基に達している。この中には、個人的に先人の業績を顕彰したいという気持ちからのものもあるが、多くは地域人一般の者が認めたとみてよいものである。

湯田中（No.44）

三八　結界石

結界石は戒壇石ともいわれ、律宗や禅宗の境内入り口に立てられているのが多い。この石塔は、江戸時代に入ってからのものがほとんどであるが、中には無紀年銘で不明のものもある。

碑文は「不許葷酒入山門」と彫られている角柱が多い。碑文中の葷酒の葷は、肉やニンニク・ネギなどの臭気のある蔬菜類や、辛のカラシ・トウガラシなどの辛味のある刺激性のものをさし、酒も含めた精力の出るといわれている飲食物をさしている。これらは仏道修行の邪魔になるということから禁じられたものである。

山ノ内町にある結界石は四基だけであるが、この碑のある寺院は立派なものであり、そこで修行する者の戒律は現在考えられないほど厳格であったことを感じさせられるものである。

渋（No.13）

三九　道　標

昔の石柱の道標は、ある方面や目的地へ行く方向を示したもの、里程を知らせるものに大別することができる大ざっぱなものである。それでも人里離れた所で、滅多に往来する人に会えない場所などでは大助けとなった。

このような大ざっぱな道案内の道標でも、分かれ道の所や辻、山の登り口、村の出入り口に立てられ始めたのは、江戸も中期に入ったころからである。これは、庶民が神社仏閣や諸国の霊場へ巡拝する習俗が盛んになったころに合致するものである。

このような旅人に便宜を与えるような思いやりの心は、観音菩薩の功徳にも通ずるもので、道標は道標柱のほかに、石造の観音様や地蔵様などの下部や側面や裏側に刻されたものも多い。

山ノ内町のように峠が多く、山道の続く地域では、親切な交通案内

前　坂（No.13）

の役目をなす道標が一一の多きに達している。

四〇　記念碑

その地域に新たな事業をして完成した記念に建てた碑で、堰や道路の開通、土地の開拓などがその対象になっている。

碑には、碑名と年月日、寄附者、協力者などを併記したものが多い。また、歴史的に記念すべき旧跡を碑としたものもあり、地域の歴史を知る上で大切なものといえる。この地域では、特に開拓に関係したもの、堰・道路のものが多いといってもよい。

何十年に一回行なわれるかどうか分からない事業を対象にしての記念碑であるから、石質も他の安山岩などの碑と異なって、大理石を使っているのが多い。その碑文にも、そのときの協力者、中心者、代表者を入れるのが普通である。山ノ内町には、この碑が三七基を数え、地域の開発事業の盛んな所であることが分かる。

横　倉（No.42）

四一　文学碑・歌句碑

文化人として認められる人や、歴史上に足跡を残したと思われる人で、この地に生まれ育った人、または他の地から山ノ内へ来て、文学的な方面で石碑を建てられるほどの文化事業に参画した人の碑を、文学碑・歌句碑として集めた。

山ノ内町は、古くから重要な街道筋にあったことや、温泉地として有名だったので、来訪する有名人は、いろいろな面で多かった。その中で、文化人として訪れた人を調査して公民館で『志賀高原を訪れた文化人』という本を出しているが、志賀高原を中心としてこの温泉郷に宿泊した文化人は、八三軒の宿帳に一二五六名が挙げられている。

これらの人は、日本では有数な文学者、芸術家であるが、それ以前

湯田中（No.16）

の江戸時代に来訪したことのはっきりしている有名な文化人も、石碑や文書で分かっている者が相当数あった。

例えば、宗祇などが挙げられるが、山ノ内町の文学碑に残されていることは貴重である。また、自分史的な性格の碑などや、結社の師匠の作品を弟子たちが碑にしたものもあるが、その当時の文学界の情勢を知る資料として大切である。

四二　峠の観音

峠の観音は、上林の十二沢から志賀高原丸池付近までの旧道沿いに建立された三五体（二体は同じ番所のもの）の石仏観音である。

製作年代は、三二体のほとんどが文政二年のもので、他の三体は明治と昭和のものである。この石仏の大きさは、高さが〇・七㍍から一・三㍍ぐらいの小型のもので、自然石を舟型や半円形にし、その中へ仏像を線彫りや浮き彫りに加工している。

峠の観音（No.２）

建立者は、平穏地区の有志でつくっていた観音講の講員によって造られ寄進したものである。伝えによると、文政二年に講員が各々分担して西国三十三番の霊場を参詣し、それぞれの寺院の本尊の写しをもらって来て石工に彫らせたといわれている。

しかし、その由因になっているものは、当時の庶民信仰の底流で盛況をなしていた巡礼の習慣が、大きかった。巡礼は巡札ともいい、霊場との交渉を密接にすることによって誓願の成就、霊験と恩寵の祈願、贖罪（しょくざい）の目的の重視をはかることで、インドでも中国でも早くから行なわれていた。

この峠の観音の散在する道は、昔から草津街道といって、山ノ内から草津温泉へ行く湯街道であり、また北信から高崎を通って江戸へ出る物資輸送の大事な支道でもあって、その利用者は多かった。

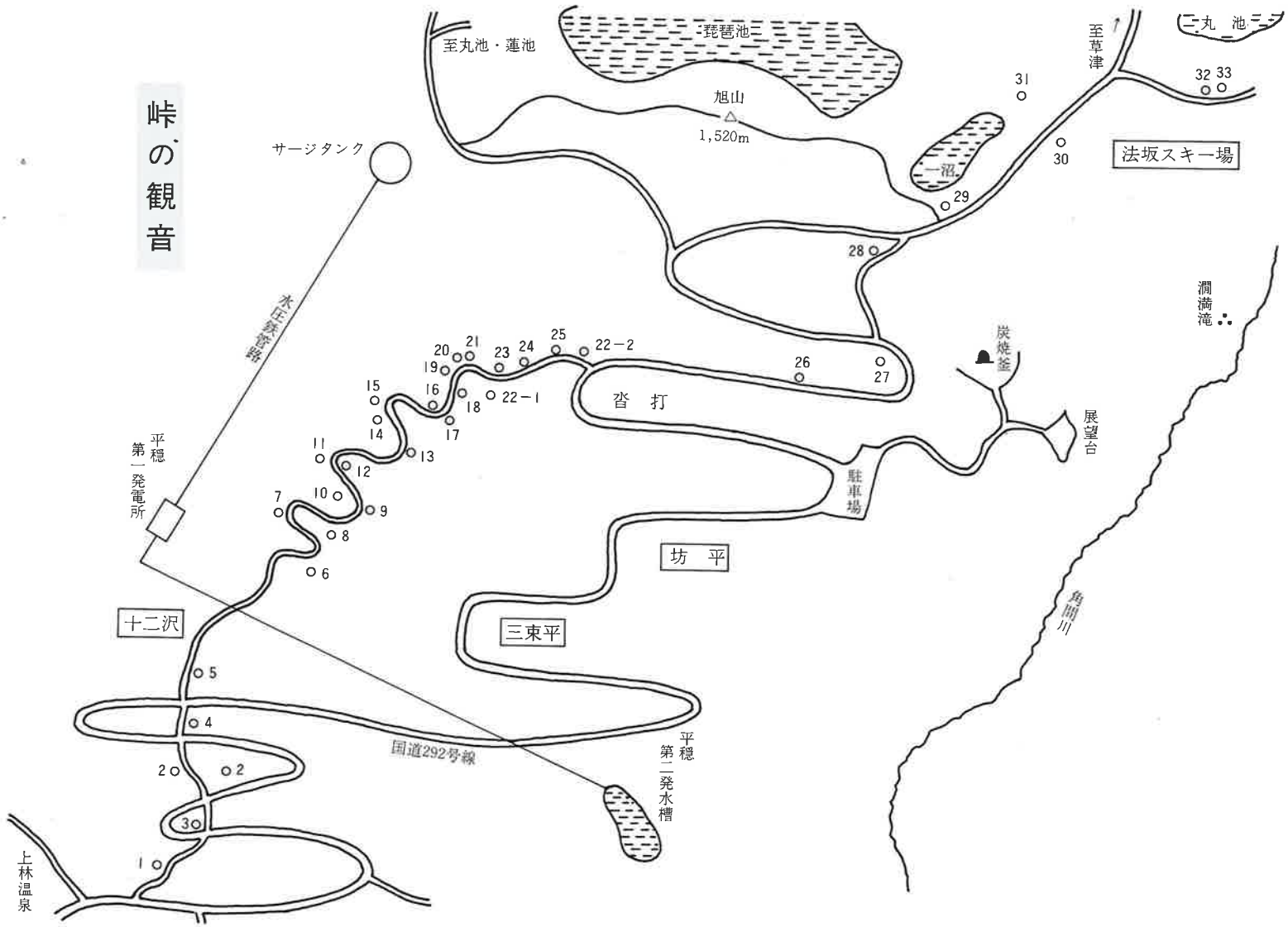
しかし、細い山道であり、難所もいくつかあって旅人たちの苦労も一通りではなかった。峠の観音は、これらの利用者の安全を祈って建てられたもので、当時の庶民の信仰生活を究明し、社会情勢を探究するのに貴重な資料である。

四三　とりで街道の観音

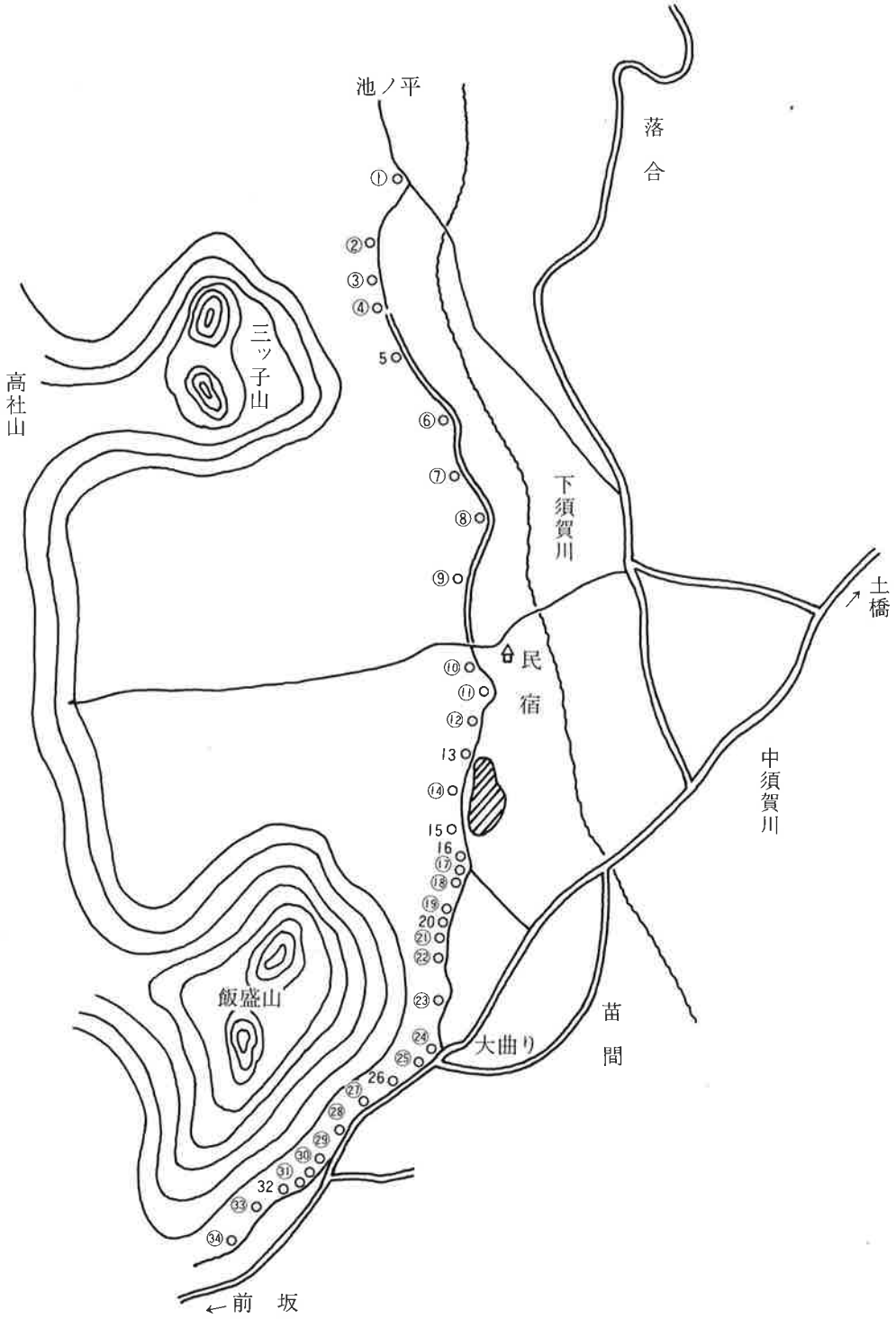
とりで街道の観音は、木島平村から続いて来た「西三三番」を、池ノ平開拓地で引き継いで「秋一番」として始められ、三ツ子山、飯盛山の山裾を倉下川沿いに東に向かい、赤坂峠付近で「秋三三番」についで「秩父三四番」で終わっている。

したがって、西三三番、秩父三四番と、それから出ている坂東三三番を合わせて、百番観音ともいっている。

峠の観音


琵琶池
至丸池・蓮池
旭山
1,520m
至草津
丸池
一沼
法坂スキー場
サージタンク
水圧鉄管路
平穏第一発電所
十二沢
上林温泉
国道292号線
平穏第二発水槽
三束平
坊平
沓打
駐車場
炭焼釜
展望台
角間川
潤満滝
1
2
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22−1
22−2
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33

とりで街道石仏の位置


池ノ平
落合
高社山
三ッ子山
下須賀川
土橋
民宿
中須賀川
飯盛山
大曲り
苗間
前坂
①
②
③
④
5
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩
⑪
⑫
13
⑭
15
16
⑰
⑱
⑲
20
㉑
㉒
㉓
㉔
㉕
26
㉗
㉘
㉙
㉚
㉛
32
㉝
㉞

とりで街道の観音（No.９）

この観音の建立年代は不明のものもあるが、慶応年間前後のものが多い。その寄贈者は、個人や四人組、五人組、二二人組など種々であるが、ほとんど須賀川地区の人である。　この石仏の立っているとりで街道は、川中島の戦いのころから使われており、以後岳北地方や、飯山・越後方面からの物資を湯田中・安代・渋へ、さらに草津へ運ぶ重要な輸送路として使用されていた。

ここの観音様の大きさは、五〇～六〇㌢ぐらいのものであるが、最後の秩父三四番は特別高く、一・五㍍ぐらいある。全部自然石を舟型や半球型にしたもので、石仏はほとんど浮き彫りになっている。この仏像の種類は、十一面観音が一番多く二〇体に及んでいる。次に如意輪観音で七体、以下千手観音が四体あり、馬頭観音などもある。総じて小型であるが、彫りに造立者や地域人の信仰の強さが表れている。その信仰は、観音信仰がもとをなしており、これだけの石像仏を創設した人たちの中には、西国巡礼や秩父巡行をした人たちもいた。

巡礼の対象は、本式にはその本院の本尊を参詣し、持っていった札を一枚ずつ堂に釘づけにするものであった。これが後にはだんだん略されて、印刷された紙へ住所・氏名を書くだけになった。それだけでなく、札所の寺院も各地方にできるようになった。県内でも、信濃三十三所めぐりの寺院ができた。さらにこれを簡単にできるように、地方の有名な寺院の境内に三十三寺の石像を安置して供養するようにした。

とりで街道の観音の造立もその趣意は共通するもので、この道を利用する人たちの安全を祈願したり、旅行で亡くなった人の供養をしたり、また道案内も兼ねた意義深いものを含んだ存在であった。